

## 22回演奏会曲目解説

### 1 ケツアルコアトルの歌(1941) (Edition:Music for Percussion,Inc.)

ケツアルコアトルとは翼のある蛇の形をしているアズテ族の神です。リッソは色が美しいメキシコの古典の写本類にこの民族の文化の象徴を見て魅力にとりつかれ、それを表現したいと作曲しました。リッソは物の中の精神を見るという発想から自動車のブレーキや植木鉢といった新しい打楽器サウンズを発見していますが、ウッドブロックやゴング(銅鑼)類も多用し、この曲ではさらにスネアドラム、トム、バースドラムまで動員しています。

### 2 オクトーバー・マウンテン(1942) (Edition:C.F.Peters Corporation)

打楽器音楽の曙光をヴァルズの「イェザシオ」に求めるとすれば、短期間にそのジャンルを拡大し、すぐレクイエムを取り入れるようになりました。しかし、ケージ、リッソがO.フィッシャーの影響を受けて周囲に目を向け、打楽器による音楽に回帰したように、村アヌも多くの作品を書いた12音技法を捨ててこの路線に乗り換えましたが、この作品には以前の影響が残っていると私は見ます。即ちオクターヴで汎用する楽器のみを用いているものの、発想はリズムパターンの組合せそのままですから。曲はリッソが主体となり旋律的に流れる第2,3,5曲とリズムパターンの反復による第1,4曲でできていますが、旋律には血を引くアルメアの影響がみられます。

### 3 組曲(1942) (Edition:Music for Percussion,Inc.)

ジャロのガムン音楽の影響を受けて書かれおり、規則正しいリズムと2分5連符のような不揃いのリズムがコントラストをなし、これが旋律的に聞こえるという音楽的な表現を切り開いています。1楽章は舐め類が伴奏するブレーキとブリンのたらいのアサブル、2楽章はサグシートの長い音の動きの上に木魚の長い音があります。3楽章はバースドラムの叩きの後、ブレーキとたらいによる6,5,3の不揃いなリズムが反復されます。

### 4 カンティクル 第1番(c.1939) (Edition:Music for Percussion,Inc.Chester Music)

先の組曲に比較すると3連符を含むものの規則的でシンプルなり素材を使っており、ダンスとのコラボレーションも可能なように作られています。

### 5 クレド・イン・アス(1942) (Edition:C.F.Peters Corporation)

20代の頃からケージはダグダグの曲を書いてきましたが、この曲もその一つで、生涯の親友となる天才ダンサーM.カンガムとの記念すべき最初のコラボレーションでした。後にケージとカンガムは同じ時間の中で固定された関係を持たないまま共存する音楽とダンスによるパフォーマンスを繰り返してゆきますが、この曲の頃には音楽とダンスはきっちりと構造で結びつけられ、構造の区切りも耳で十分捉えられるように書かれています。この曲では空き缶を叩くパートがあります。当時、ケージは主に打楽器アサブルとプリヴァティブの曲を書いていましたが、ある時映画製作者のO.フィッシャーが「物を叩いたり擦って音を出すことは、その物の精霊を解き放つことだ」の言葉に触発され、益々こうした作品に没頭して行きます。まるで問いかけるように物に触れる・叩く、すると物が応えて魂の音を放つ、ケージは放たれた音に耳を傾ける行為を、作品だけでなく日常生活でも生涯にわたり実践しました。この曲ではレコード(今回はCD)、内部奏法を含むピアノが加わり、音色のコントラストと小気味よいリズムが魅力的な音楽となっています。

### 6 森の歌(1951,rev.1992) (Edition:Peermusic International Corporation,Inc.)

リッソは多彩な作風をもった作曲家ですが、1961年から翌年にかけて日本、韓国、台湾に留学しています。そこで学んだ楽器を取り入れた作品もありますが、さらに晩年にはヨーロッパスタイルの作風も見られ、この作品もその流れにあります。曲のスケッチは1951年当時にできていましたが、今の形は1992年の作品です。3曲からなり、ピッコロとフルート、グアイチ、ピアノにリッソとグアイチラフオンが絡み合いながら進行します。各曲の冒頭にリッソ自作の詩が添えられています。

### 7 カンティクル 第3番(1941-1942) (Edition:Music for Percussion,Inc.)

カンティクルとは「賛(美)歌」又は、「神の栄光を褒め称える歌」という意味を持っています。カキとキターが使われていますが、カキは、メキシコのビニッドやその彫刻の紋様といった古いものを思い出させ、キターはテンアメリカの雰囲気を出しています。長い曲(約18分)ですがリズムミカな部分とメロディアスな部分が交互に繰り返され、打楽器という厳しい音素材を使っているにもかかわらず、温かい手触りをもった音楽となっています。(記:小林秀樹)